

スカルノ「わたしはそれほどダイナミックではない」

『パンジ・イスラーム』第二九号、一九四〇年¹

訳と解説 佐々木 拓雄

【解説】

トルコのムスタファ・ケマル・アタテュルクの名前が広く知られ、世界各国の歴史教科書に記されるようになったのは、彼がオスマン帝国時代まで存続したカリフ制度の廃止とともに政教分離を実行したからである。しかしながら、イスラーム圏におけるの宗教と国家の関係をめぐる問題は、トルコにおけるケマルの決断をもって解決したわけではなかった。多くの国にとって新生トルコは、見習うべきとはかぎらない——それどころか激しい拒絶の対象ともなりうる——一つの事例にすぎなかった。

ふり返ると、二〇世紀のあいだイスラーム圏の国々では、国民国家という近代的な器の中にイスラームをどう位置づけるかについての論争が延々とつづけられる傾向にあった。たとえば、運動家と人民が一致して「ムスリムの国」を求め、インドから離別したパキスタンでも、建国後、政教関係をめぐる見解の対立は政治の場をかき乱しつづけた。また

1 原書は 'Sukarno, "Saya Kurang Dinamis", *Panji Islam*, No.29 (22 Juli), 1940. 『パネジのイスラム』 Sukarno, *Dibawah Bendera Revolusi*, vol. 1, Jakarta, 1959. (pp. 447-455) に所収されている。

イランでは、強引な政策と異議申し立ての応酬のすえに政教分離の体制が打倒され、ケマルの時代のトルコとは正反対の方向で、政教一致を掲げた「イスラーム国家」が成立した。では、世界最大のムスリム人口を抱える国であるインドネシアにおいてはどうかであったか。

私は以前、本誌の第七四号と第七五号において、一九八〇年代のインドネシアで交わされたヌルホリス・マジッドとモハマッド・ルムの「政治書簡」を紹介した。そのとき解説したように、理知と互いの敬意を含んだこの二人のやりとり(発端はアミン・ライスの発言であった)が各所に出回り、広く共感を得たことよって、インドネシアにおける宗教と国家をめぐる論争は一応の決着をみたといわれている。事実、それ以後を見ると、社会的なイスラーム化を推進する動きが活発になる一方で、「パンチャシラ」という世俗的な国家原則を維持することへの合意は多くの集団や人々のあいだに行きわたっている。論争の火種は完全には消えていないにせよ、これまでの経緯を「歴史」としてふり返るぐらゐの余裕はありそうだというのがこの国の現在地である。

今回は、国民国家インドネシアの黎明期におこなわれた宗教と国家の関係をめぐる論争がいかなるものであったかを理解するために、スカルノ(一九〇一—一九七〇)が著したある論考の翻訳と、それに先立っての解説をおこないたい。論考のタイトルは「わたしはそれほどダイナミックではない」(Saya Kurang Dinamis)である。一部の研究者のあいだではよく知られた論考であるが、日本語の全訳として発表されたものはまだない。

政治家スカルノと知識人スカルノ

スカルノは、言わずと知れたインドネシア共和国の初代大統領である。二〇世紀半ばに独立を果たしたアジアの諸国には、往々にして国父とよばれるスケールのカリスマ的指導者が存在したが、スカルノもそのような指導者の一人であつ

た。稀代の演説の名手であったことはよく知られるところで、彼が集会の壇上に立つたばに独立運動は活気づいた。独立後は、国内はむろんのこと、アジア・アフリカ会議や非同盟諸国会議などの国際舞台においてもその能力を発揮した。意気軒昂で、風采がよく、新生地域大国の象徴として多くの要件をそなえていた。

しかしながら、その政治家人生は苦難の連続であり、スカルノ自身にとつてもインドネシアにとつても言葉にならない惨劇とともに幕を閉じた。そのことゆえにスカルノは、成功した指導者としては語られない。では代わってほかの誰かが治めていたらインドネシアは惨劇を免れたのかという点、歴史家は首をかしげるだろう。スカルノをとりまく状況を見た人類学者のクリフォード・ギアーツは、惨劇の後に書いた論文で、インドネシアの問題は、文化的に多様でありながらその多様性を諸勢力が受け入れようとしないことだと指摘した。それとともに、「世界で他に例をみないほど宗教的シンボルの密度が高い」この国においてスカルノは、「それらの諸シンボルを広く目くばりするだけでなく、それらを新生共和国の汎教理的な国家宗教にまとめあげるというたぐいまれな能力をもった男」であったと評している。どう解釈するにせよ、これはスカルノという存在を的確に言いあらわした表現であるようにみえる。

2 翻訳『イスラーム国家など存在しないーヌルホリス・マジッドとモハマッド・ルムの政治書簡』(アグス・エディ・サントソ編、ジャンバタン社、一九九七年)。解説付きの前編は『久留米大学法学』第七四号に掲載。

3 「パンチャシラ」は「五原則」の意味。①唯一の神への信仰、②公正で文化的な人道主義、③インドネシアの統一、④合議制と代議制における叡智によって導かれた民主主義、⑤全インドネシア国民に対する社会的公正、をその内容とする。

4 「九月三〇日事件」として知られる軍事クーデターとその直後の国軍による共産党員・共産党シンパの集団虐殺のこと。犠牲者の数は明らかではないが、最低でも五〇万人以上とされ、さらには百万人以上であろうという報告もある。

5 C・ギアーツ『文化の解釈学Ⅱ』(吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘充・板橋作美訳、岩波書店、一九八七年)所収の論考「意味の政治」(原書は Clifford Geertz, "The Politics of Meaning", in Claire Holt with the assistance Benedict O'G Anderson and James Siegel ed., *Culture and Politics in Indonesia*, Cornell University, 1972) 111-115頁)。

このスカルノが、政治家であると同時に一人の卓越した知識人でもあったという事実は知っておかねばならない。スカルノは、その膨大な量の演説録を含めると、彼が生きた時代のインドネシアにおいておそらく最も多くの著述を残した人物であるといえるだろう。その著述に触れるたび、われわれが感じさせられるのは、目の覚めるような博識と一つのことばに宿された力である。

これはスカルノ一人にかぎったことではない。初代副大統領のモハマッド・ハッタ(一九〇二—一九八〇) しかり、スカルノの論敵として知られたモハンマド・ナツシール(一九〇八—一九九三) しかり、この時代のインドネシアを牽引した知識人たちの顔ぶれをみると、おしなべて同様の博識とことばの力をもっていた。それが何から生まれたのかといえ、ひとつに植民地支配への抵抗に不可欠な英気や向学心からであったと想像するが、同時に思いあたるのは、「イスラームと近代」ないし「イスラームと国家」のあり方をめぐる問題と格闘するという難題が、彼らの知的営為の場にあらかじめ組みこまれていたという事実である。強大な形而上学的パワーを放ちつつ、近代的価値——すでに彼ら自身の一部となってしまうもの——と真つ向から対峙する側面をもつイスラームという宗教の存在があったからこそ、彼らの思考は研ぎ澄まされ、深遠さを得ていったのではないか。

イスラームを近代化せよ

じつさい、「イスラームと近代」および「イスラームと国家」のあり方をめぐる問題は、スカルノの政治思想におけるひとつの重大テーマであった。またそれは、彼が最も一貫してひとつの主張を展開するところのテーマであったともふり返られる。端的にいえば、この問題についての彼の主張は、最初から最後まで「イスラームを近代化せよ」という点において揺らぎがなかった。ただし、主張に揺らぎがなかったからといって、彼自身が変化を経験しなかったわけ

はない。

スカルノは一九二六年に、デビュー論文「ナシヨナリズム、イスラミズム、マルキシズム」⁶を発表する。これは当時三つの潮流に分裂していた反植民地運動を一つにまとめることの意義を説くものであり、このときすでにイスラームは、時代に取り残されかねず、それゆえに変革する（ナシヨナリズムと結合する）必要があるものとして、長い考察の対象となっている。しかしながらその内容は、自身を含めてイスラームの問題を語るというよりも、一人のナシヨナリストとして、あたかも外部から「イスラームの民 (Kaum Islam)」を叱咤するかのようなものであった。

この時代、スカルノが「イスラームの民」と呼んだ人々の多くに通じる特徴は、幼い時分から聖典や説教師のことばとともに生活があり、それがそのまま世界観の基礎をなしていることであつた。『ジャワの宗教』⁷においてギアーツが「サントリ」と類型化したのもそのような人々である。それにたいしてスカルノは、父親がジャワ人ムスリム、母親がバリ人ヒンドゥー教徒という家庭で育ち、植民地政府が用意した近代的で世俗的な公教育の路線を突き進んだ人であつた。たとえばアブドゥル・ムイスが描いたような「西洋かぶれ」したインテリとは明らかに異なつてもいたが、この頃のスカルノはイスラームの伝統と悪びれずに距離を置いていたようにみえる。

スカルノがよりみずからの問題としてイスラームをとらえ、イスラームについての思索を深めていくのは右の論文よりも後のことで、そのいきさつは彼自身によつて語られている。植民地政府による二度目の逮捕（一九三三年）ののち

6 Sukarno, "Nasionalisme, Islamisme, Marxisme", *Suluh Indonesia Muda*, 1926.

7 Clifford Geertz, *The Religion of Java*, Glencoe, Illinois: Free Press, 1960.

8 アブドゥル・ムイスは一八八六年に生まれ一九五九年に死没した作家。独立運動の闘士でもあつた。一九二八年に書いた小説 *Salah Asuhan* (邦訳『西洋かぶれ—教育を誤つて』松浦健二訳、井村文化事業社、一九八二年) はインドネシア文学史上に残る傑作。

に送られたフローレス島の流刑地エンデにおいてスカルノは、当時「イスラーム統一協会」の指導者であったアフマツド・ハサン(一八八七—一九五八)¹⁰と約二年間にわたって手紙のやりとりをする。のちに『エンデ書簡』¹¹として公表されるその文通の大部分において彼は、イスラームの遅れをどう取り戻すかを議論していた。そしてその最後の手紙のなかで、自身の魂 (Jiwa) の変化について次のように告白した。

「これまでの手紙にはわたしの魂の軌跡の一部分が描かれています。ふらふらとしていたわたしのイスラームの魂はイスラームを確信する魂となり、神の存在を知ってはいてもそれに身を捧げていなかった魂は日々神と向きあう魂となり、神性について哲学を論じるばかりであった魂は日々神に祈りを捧げる魂となってゆきました」¹²。

その後、マラリア罹患をきっかけにエンデから移送され、一九三八年から暮らすことになった次の流刑地スマトラ島のベンクルには、イスラーム社会教育組織「ムハマディア」¹³の支部があった。スカルノは、同組織の学校で教師をするなどしてその活動に加わった(ベンクルで彼は近隣との交流を許可された)。ムハマディアは、「クルアーンと預言者のスンナに立ち返る」ことを標榜するイスラーム改革主義の組織であり、古い因習や宗教的権威への盲従を排することでイスラームを近代に復興することをめざしていた。「サントリ」の活動の場のひとつであり、スカルノにとって居心地の良さは保証されなかったが、エンデでの覚醒の経緯からすると、こうした成り行きは自然でもあった。

ところが、そこでスカルノは、大きな落胆を経験することになる。当然の話でもあるが、「クルアーンと預言者のスンナに立ち返る」ことは「イスラームの近代化」を確約するものではない。スカルノは、ムハマディア内部に残存するいくつかの、彼からみて時代おくれの慣習について異議を唱えた。有名な「カーテン問題」¹⁴はそのひとつである。集会所に設置された男女を仕切るカーテンを見てスカルノは憤った。彼によると、このカーテンは女性の隷属的地位を示すものであり、イスラームの本質を見失った因習、あるいは神が与えた人間の理性を軽視する悪しき因習にほかならなかつ

た。スカルノの訴えは騒動となって広がり、一九三九年七月には、ムハマディヤ全国大会の開催を控えた同組織の議長のもとにも彼の意見書が届けられた。イスラームの改革を唱えていながら、その実は旧態依然とした人々にたいして、スカルノは批判を強めていった。

宗教と国家を分離せよ

翌一九四〇年は、知識人スカルノにとって昂揚の年となった。この年、彼は、イスラームと近代のあり方をめぐるそれまでの思索の成果を次々と猛烈な勢いで書きあらわした。発表媒体は、メダンを拠点とする週刊誌『パンジ・イスラーム』（一九三四年創刊）であった。原稿の長さは定まりがなく、ひとつのタイトルにつき複数回にわけて掲載されることもあった。発表されたものを時系列に並べると、「イスラーム理解を若返らせる」¹⁵、「らくだの社会と飛行機の社会」¹⁶、

9 イスラーム統一教会 (Persatuan Islami: 通称 Persis) は一九二三年にジャワ島のバンドンで設立されたイスラーム改革主義の団体。アフマッド・ハサンは一八八七年生まれ、一九五八年死没。イスラーム統一協会の創設者であり、モハンマド・ナッシールの師でもあった。

11 『エンデ書簡』(Surat-Surat Islam dari Ende) については土屋健治が詳しくとりあげているので参照されたい。土屋健治『インドネシア—思想の系譜』勁草書房、一九九四年、一九三—二〇五頁)。

12 後年著した自伝 (Sukarno: *An Autobiography, As Told to Cindy Adams*, Bobbs-Merrill, 1965; 邦訳『スカルノ自伝—シン・デイ・アダマスに口述』黒田春海訳、角川書店、一九六九年) においてもスカルノは、エンデでの孤独な流刑生活は、あらためて神と向きあう機会をあたえてくれるものであったと回顧している。

13 ムハマディヤは、アフマッド・ダーラン（一八六八—一九二二）によって一九二二年にジョグジャカルタで設立された。学校や病院の運営を中心に、今日まで全国規模で活動を展開している。

14 カーテン問題については、土屋健治『前掲書』二〇六—二〇七頁が詳しく。

15 Sukarno, "Me-"muda"-kan Pengerahan Islam", *Panji Islam*, No.12-15, 1940.

16 Sukarno, "Masyarakat Orta dan Masyarakat Kapal-udara", *Panji Islam*, No.16, 1940.

「なぜトルコは宗教と国家を分離したか?」、「わたしはそれほどダイナミックではない」、「浅学菲才のイスラーム」¹⁷である。

このいずれの論考も重要な主張を含んでおり、のちにすべてスカルノの個人論集『革命の旗のもとに』に所収されることになる。¹⁹ 全体をつうじて、イスラームを近代化せよという主張が基調となっているが、「なぜトルコは宗教と国家を分離したか?」とそれにつづく「わたしはそれほどダイナミックではない」の二篇はとくに、「イスラームと国家」のあるべき関係を掘り下げて論じたものとなっている。今回紹介するのは、このうちの後者である。

その紹介に先立って、あらためてイスラームの近代化についてのスカルノの主張を概観しておこう。まず、イスラームの信仰が重要であるという点、聖典クルアーンと預言者のスンナに立ち返るべき点について、スカルノと全てのムハマディヤ・メンバーとのあいだに相違はなかった。スカルノが彼らの多くと異なったのは、人間の理性を活用する幅を最大限までひろげようとした点である。イスラーム法学にしたがえば、人間の行動は、「ファルド(義務)」「マンドゥーブ(推奨)」「ムバーフ(任意)」「マクルーフ(忌避)」「ハラーム(禁止)」という五つの範疇に分けられる。スカルノは、社会が複雑化した近代においてはムバーフの領域がひろがっており、そこで何を為すかが重要であると考えた。たとえば、クルアーンに「石鹸」にふれた箇所はなく、預言者は手桶を水と砂で洗いなさいと言っている。しかしそれは預言者の時代に石鹸が存在しなかったからであり、二〇世紀の人々に石鹸を使うなと命じているわけではない。むしろ、清潔にすることが目的であるのなら、砂ではなく石鹸を使えばよいというのがスカルノの主張であった。いわばクルアーンの教えの「実質」を汲んだとみることができようが、それは前述のカーテン問題についても同様で、神も預言者も女性の隷従を否定していたのだから、その趣意にこそ従うべきだということになる。スカルノによれば、イスラームの近代化とは、時代が近代であるから推し進められるべきというよりも、たんにイスラーム本来の姿に立ち戻る

ことでもあった。

スカルノは論敵を向こうに堂々とこのような主張をくりひろげたが、結局のところ未解決なのは、イスラーム法学による解釈の相違の問題であった。スカルノがムバーフとみなすことは本当にムバーフなのか。ふたたびカーテンを例にとると、これを大事な「秩序」のためのものとみなす考え方もある。その場合、カーテンは女性の隷従を強いるために存在するわけではない。人間が弱い存在である以上、間違いを犯さないための予防策が必要であり、それがカーテンを引くことである。そうすることが神の教えであり、預言者のスンナなのである。スカルノの主張に対しては、多くの者によってこのような反駁がなされた。

では、主題が「イスラームと国家」となるとどうであったのか。結局はここでもイスラーム法学をめぐる立場のちがいが、スカルノと批判者たちのあいだの溝を深めることになる。スカルノからみて、イスラーム法なしシヤリーアは、ムバーフの領域がひろがりつづけている以上、社会を統制する実定法としての役割を果たさない。だからそもそも「シヤリーアに基づくイスラーム国家」の形成という選択肢は無用であり、かつ有害である。イスラームは行動する人々の内面において生かされるべきであり、国家はナシヨナリズムやデモクラシーを支柱とする近代的規範とともに作られるべきである。

17 Sukarno, "Apa Sebab Turki Memisah Agama dari Negara?", *Panji Islam*, No.20-26, 1940.

18 Sukarno, "Islam Sontoloyo", *Panji Islam*, 1940.

19 論集は 'Sukarno, *Dibawah Bendera Revolusi*, vol.1, 1959. 国内の研究論文では、土屋健治『前掲書』と間苦谷栄『現代インドネシア研究—ナシヨナリズムと文化』(勁草書房、一九八三年)において、これらの論考をもとにしたスカルノのイスラーム論の紹介がおこなわれている。

20 便宜上、以下も「ムバーフ」と記すが、「ジャーイズ」(「許されたもの」という意味)と表されることもある。

これに対して批判者たちは次のように言う。イスラーム法学は依然として有効であり、国家形成において重要な役割をもつ。現に神の啓示や預言者のスンナは事細かにムスリムの生活を律する文言を残している。スカルノがいうほどムバーフの領域は広くなく、シャリーアは実定法としての役割を失わない。また、ナシヨナリズムへの依拠は神の教えから逸脱している可能性がある。ムスリムの務めはあくまでシャリーアを実践することだ。百歩譲って国民国家が欠くべからざるものであるにせよ、それはシャリーアを実践するための仮の器であり、けっして目的であってはならない、と。²¹

論説「わたしはそれほどダイナミックではない」について

スカルノがケマル・アタテュルクのトルコ、ひいてはイスラーム圏における宗教と国家の分離の正当性を伝えようとした「トルコはなぜ宗教と国家を分離したか?」は、七回に分けて掲載された長編であった。これを発表するあいだ、スカルノはムハマディヤのソロ支部によって刊行される週刊誌『アデイル』(一九三二年発刊)の執筆者たちから強い批判を受けることになった。彼らは、スカルノによるトルコの現状についての認識とその大胆な聖典解釈にたいして拒絶の態度を示し、「スカルノはダイナミックすぎる」と皮肉った。論考「わたしはそれほどダイナミックではない」は、その批判を受けてのスカルノの応答である。

この短い論考にはひとつの見落とせない思想的意義がある。²²それは、「トルコはなぜ宗教と国家を分離したか?」では控えめにしか表現されていなかった「インドネシアの地におけるイスラーム」についてのスカルノのとらえ方や考え方が、この論考では十分なかたちで示されているということである。言葉を換えると、博識の知識人スカルノではなく、土着の政治家としてのスカルノがどのような国民国家インドネシアの独立と繁栄を描いているのが、ここではつきりと示されている。

この論考の見どころはまた、スカルノの特徴ともいえる現実主義的な思考の回路が、「雲の上を漂う理想主義者」である批判者たちへの批判というかたちで存分に現れ出ているという点にある。専門の研究者のあいだでは、政治家人生後半の情動的な言動の印象が勝るせいも、一方にハッタラの「実務家」タイプを置きながら、他方でスカルノを夢想家の理想主義者として扱うことが定番ようになってきた。ある時期についてそうした図式は成り立つかもしれないが、そこだけを見ていてはスカルノの像をとらえ損なうおそれがある。彼の立脚点は終始、現実主義にあり、そこをよく認識することによって、彼の時代のインドネシア政治をめぐる多くの事柄も明らかにするのではないかと思う。

さらなる注目点として、この論考には、現実主義的な思考に沿いつつ、おそらくは政治的にやむなしとの判断からスカルノが選びとつたのだと考えられる、ある思想上の「妥協」が示されている。論考の後半においてスカルノは、イスラーム国家を希求する『アデイル』の論敵たちに対して次のように言う。「あなた方はあなた方の理想を追求すればよい。ただしあなた方も認めるデモクラシーに従ってである。できるものなら真正銘のイスラーム精神をもつ民衆で議会をあふれさせてみよ。できないのなら、それは民衆がまだ『イスラーム民衆』となっていない証である」と。

威勢よく聞こえるが、ここに違和がある。「イスラームを近代化せよ」（近代化したイスラームこそがあるべきイスラームだ）という普段の彼の主張からすると、「真正銘のイスラーム」という誉れある形容を（彼の訴える「近代化」を受け入れない）相手に譲りわたすのはおかしなことである。たとえば「清掃員のアブドウル」がイスラーム国家を求める代表者を選ばずとも、彼が「真正銘のイスラーム」教徒ではないなどとはいえないと、スカルノならば論理展開

21 このナショナリズムをめぐる立場の相違について、間幸谷はスカルノに対するナツシールの反論を用いながら考察している。
間幸谷栄『前掲書』二五〇―二五六頁。

22 この「思想的意義」については、土屋健治『前掲書』二二二頁でも指摘されている。

することもできたのではないか。

それをせず、スカルノがこの「妥協」を選んだ理由についてここでは追及しない。ただ、ひとつ指摘しておかねばならないのは、こののち今日までのインドネシア政治には「真正正銘のイスラーム」を排他的に自認する勢力が、デモクラシーの制度内で非民主的な言動をくりひろげるといふ逆説が、まるで持病のごとく繰り返し現れるようになったという事実である(非民主的な勢力といえ、かつての共産党や国軍などもそれに当てはまるところがあり、またほかならぬスカルノ自身が後年そのようなふるまいを目立たせるようになったことを忘れてはならないのではあるが)。むしろこれは、このときにスカルノが根気強く思想上の闘いを継続していればどうにかなったという話ではない。しかし、すくなくとも、彼の「妥協」とともに残された思想的課題を彼自身が解決する機会をふたたび巡ってこなかったし、彼の後継となる者たちも自分のあいだ現れることはなかった。

パンチャシラとスカルノ

ところで、スカルノはインドネシアの国家原則パンチャシラの立案者でもある。一九四〇年に発表されたイスラーム(と近代あるいは国家)をめぐる一連の論考は、ナツシールとの論争²³を経ながらも、修正をほどこすことなくパンチャシラの立案へと結びついていく。ちなみに、一九四一年から独立の年まで、スカルノの大きな関心は進行中の第二次世界大戦に向けられ、相対的にイスラームの問題は論じられなくなった。それだけに、一九四〇年という年に発表された一連の論考は、パンチャシラの成立と密接なつながりをもつといえる。

パンチャシラの立案意図を知るための最も直接的な資料は、独立の二ヶ月余り前、一九四五年六月一日に開催された独立準備調査会におけるスカルノの演説録(「パンチャシラ誕生」と名づけられるもの)²⁴である。その中心をなすこ

ろにおいては、論説「わたしはそれほどダイナミックではない」で示されたスカルノの「妥協」部分が、ほとんどことばを変えずに入れ込まれている。その点で、パンチャシラもまたスカルノの現実主義的思考の産物であるといえるかもしれない。むしろ、現実主義的思考の産物であるから壊れやすいというわけではなく、実際はその逆であろう。いくたびかチャレンジを受けながら、今日までパンチャシラは独立時の形のまま国家原則でありつづけている。

最後に、簡単にではあるが、スカルノのイスラーム論への評価についてふれておこう。今日のインドネシアではもはや希少な存在となったが、独立前後のこの国には、名目上はイスラーム教徒でありながらイスラームを軽視し、もっぱら西洋由来の世俗主義的な価値を称揚するインテリが数多くいた。彼ら「通常のナシヨナリスト」と区別するかたちで、スカルノを「宗教に中立の立場をとるナシヨナリスト」として位置づける見解がある。²⁵ この見解はそのとおりで、スカルノのイスラーム論に接するさいに避けるべき誤りは、世俗主義者が政敵を懐柔するためにイスラームの「扮装」を行なっていることとみなすことであろう。

その一方で、スカルノを研究した人々のやはり多くに共通するのは——エンデでの「覚醒」を経たとしても——スカルノは第一義的にナシヨナリストでありつづけたという見方である。もし彼が真にイスラームを重視していたならば、ナッシールらが訴えた啓示宗教としてのイスラームのあり方を彼もまた理解し、それと敵対しない解決策を模索したであろうというわけだ。²⁶ その考察どおりにスカルノが「啓示」を軽視していたのだとすれば、ナッシールをはじめとした

23 たとえば、間苧谷栄『前掲書』二三八―二六二頁を参照のこと。

24 *Manusia dan Masyarakat Baru Indonesia* (Cinusa), P. N. Balai Pustaka, Jakarta, 1963, pp. 295-313. 日本国際問題研究所・インドネシア部会編 播里枝監修『インドネシア資料集・上―一九四五―一九五九年』一九七二年、一―一七頁に全訳がある。

25 間苧谷栄『前掲書』二二九頁など参照。

26 間苧谷『前掲書』二六〇頁など。間苧谷は、ナッシールと対比しながら、スカルノのイスラームは「啓示宗教としての性格がきわめて希薄なものである」と評している。

論敵との生産的な対話の可能性は、最初から閉ざされていたことになる。

けれども、はたしてそうなのだろうか。ある人物への評価というのは、その人物が生きた時代やその直後の時代には正当になされることが多い。ひとつの思想的営為が存在しても、それだけではまだ不十分で、類似の営為の集積がともなって最初の営為の新たな意味が発見されるということが得てしてある。スカルノのイスラーム論への評価をどう定めるかは、私たち研究者の目下の課題でもあるだろう。

【訳】

わたしはそれほどダイナミックではない²⁷

『アデル』誌の諸兄は、わたしのことをダイナミックすぎるとおっしゃっている。諸兄はまた、そのダイナミックさはわたし自身の性分によるものとお考えのようだ。そのとおりなら、わたしはこれをたいへん名誉なこととして受けとめたい。なぜならわたしは、どの民族、どの方面であれ、あらゆるダイナミックな人物に対して大きな敬意を抱いているからだ。たとえ敵であれ、ダイナミックな人物には帽子をとって敬意を表したいし、ダイナミックさを欠く友人に対しては「テンペ」だ「しよばい」(「内は訳者。以下も同じ」と言つてやりたい。もしだれかがわたしのことをダイナミックではないと評したとすれば、それはわたしにとっては大きな不幸である。昼も夜もわたしは、アッラーがわたしをもっとダイナミックな人間にしてくださいと祈っているのだ！

であるから、『アデイル』の諸兄がわたしのことをダイナミックすぎるとおっしゃるならば、わたしはこうお答えしたい。「残念ながら、みなさん、わたしはまだ、それほどダイナミックではありませぬ」。

この論考を最後までお読みいただいたら、諸兄は、なぜわたしがそう言うのかを理解されるだろう。わたしは「壊す」ということが大好きである。ただ「壊す」ことよつてのみ、人は公衆の間に立ち入り、彼らが目覚め、ある問題について関心をむけるよう促すことができる。公衆とは、いつも眠たそうで、固まって動かない人たちである。そのような公衆に対して、まわりくどいやり方で関心をもってもらおうとしても彼らは振り向かないし、半分眠ったままであるかもしれない。彼らに関心をもってもらいたければ、大きなハンマーを手にとって、雷鳴が轟くような音がするほどに激しく机に振り下ろさなくてはならない。

こんなことをいうと、あなた方は笑うかもしれない。しかし大きなことを成しとげる人たちの仕事のしかたを見ていただきたい。彼らの思想について賛否あることは別にして、見てほしいのは、彼ら全員につうじる仕事のしかたである。まわりくどいことをする人など一人もいない。彼らは自分の考えを、それが甲高く反響して電光がきらめくまでに、激しく社会のど真ん中に打ちつけるのだ！ ルターはどっちつかずの仕事をしなかった。マルクスも、バクーニンも、レーニンも、トロツキーも、耳触りのよい言葉は用いなかった。ヴィヴェーカーナンダは、あたかも上空から爆撃をおこなうかのようにだった。ムツソリーニは「人生とは危険なもの」という人生哲学を抱き、ヒトラーは、人生における至高の理想は、つねに「ブルタリタット」「粗暴な言動」と訳されるドラムの演奏曲」にふるまうドラマー（鼓手）になるこ

27 この論考では、表題を含めて“dynamis”という語が頻繁に使われており、これはそのままに近いかたちで「ダイナミック」と訳すことにした。在来語に置き換えることも考えたが、適切な表現が見当たらない。たとえば「活力的」や「急進的」では、意味に明らかなずれがある。

とだと考えている。さらに、あなた方にとってよりなじみのあるお手本があることを思い出さないか？ そう、預言者ムハンマドというお手本である。マツカで声をあげた最初の日から、預言者は「騒ぎ」を起こしつづけた。彼は、うるうると立ち回ることやまわりくどいことはしなかった。彼は、どこにも歯止めをかけないやりかたで、みずからの考えを社会に訴えかけたのである。

『アディル』のあなた方は、たとえば男女の間を仕切るカーテンの問題についてのわたしの見解がダイナミックすぎるとおっしゃっている。しかしわたしがそのカーテンについてダイナミックにとりあげなかったら、そのカーテンが市井の人の口の端に上ることもけつてなかったのだ！ そしていま、うれしいことに、ある非常に有名なイスラームの指導者がわたしの見解に賛同してくれるということを、わたしは直接その方の口から聞いている。その方は、「じつくりと」精査する必要があるとおっしゃってもいるのだが、同時に、わたしがこの問題を分解して議論をできるようにしたのは、きわめて意義深いことだと認めてくださっている。

そうだ、わたしは「壊す」ということが大好きなのだ。もちろんわたしはそれがひとつの社会貢献だと思っている。わたしはたしかに「ハンマーをあつかう」ことが大好きである。ハンマーを振り下ろしたその音に、「眠りこけ」かけていた人々が仰天して目を覚まし、にぎやかに議論をはじめめる。そして——考えるようになればよい。カーテンの是非をめぐる問題はすでにひとつの「ホットな」問題となっており、ほかにも多くの問題が関心を集めるようになっていく。ありがたいことにわたしは、ウラマーたちの凝り固まりやすさや、理性をないがしろにする宗教の劣悪さ、律法への盲従を求める宗教の弊害、あるいは宗教と国家の問題における不見識について、警告をおこなうためのゴングを持っている。実際、そのわたしのゴングは、わたしたちの民族の「思考の精神 (denkende geesten)」を、もういくたびも揺さぶってきたのだ。

わたしの書いたものを人が「騒ぎ」としてとりあげてくれるのは、わたしにとつては「ご馳走をこしらえてくれる」ようなものだ。わたしに反対しようと、賛成して握手を求めてごようと、いずれにしてもわたしにとつては計算づくのことである。それはどうということのない騒ぎであり、むしろ有益なものであるとわたしは思う。それはわたしがねらってやっていること、望んでそうなっていることであるのだ。わたしはわざと「机の上にハンマーを振り下ろし」ている。そして、おかげさまで、いまや公衆はその「ハンマー」に反応し、にぎやかに語るようになってきている。賛否が入りまじった雑誌や私的な書簡の束がいまわたしの机の上に置かれている。信じてもらいたいのだが、この雑誌や書簡を前にして、わたし自身が、どこのだれよりも深く幸せを感じている。なんとありがたいことだろう。わたしが、ともに考えようと人を誘い、人がそれに応えてくれているのだ！

わたしがハンマーの音を轟かせて注意を喚起する諸問題が、引きつづき公衆のあいだで「騒ぎ」を呼んで、とことん語られるのならそれでよい。そのうち必要に応じてわたしも言葉を継ぎ足していこう。

しかしながら、宗教と国家をめぐる問題についてだけは、いまこの場で説明をくわえなくてはならない。というのは、わたしはこの問題が「宗教の専門家」の間だけで話され、「国家の専門家」がなおざりにされるのではないかという懸念を抱いているからである。『アデイル』のあなた方はこう書いている。「ケマル・アタテュルクは宗教の専門家ではなく、ただの国家の専門家であるにすぎない。イスラームの専門家でもウラマーでもない者が、統治を独立させたいという話だとはいえ、どうしてイスラームの教えにかなったそれを構想することができようか」。

『アデイル』のあなた方のおっしゃるとおり、ケマル・アタテュルクは「イスラームのウラマー」ではない。しかし、あなた方が理想とする国家の構想については、ただイスラームのウラマーだけが関与を許されるという（すくなくとも

28 ハジ・アグス・サリム（一八八四—一九五四）のことかと思われる。土屋健治『前掲書』二〇七—二〇八頁を参照。

わたしはそのような印象をいなく、あなた方の言葉に、いったいいかなる正当性があるのだろうか。もしあなた方がほんとうにそのような理想を抱いているとするならば、(一般に宗教の専門家でもウラマーでもない) あらゆるインテリ層は、この問題に対してお暇の挨拶をするよりほかにないではないか。

あなた方の考えのなんとさっぱりしていることか!

そのようなわけだから、より深くわたしの考えを理解してもらうために、わたしはその宗教と国家の分離の問題について、いまここで少し言葉を足してお話しをする必要を感じているのである。

まず——まったく不躰な言い方で申し訳ないのだが——わたしは『アディル』のあなた方に聞きたい。あなた方はあのわたしの連載記事をきちんと読まれたのだろうか? そしてまた、なにゆえあなた方は、あの連載が終了するまでの時間を待てなかつたのか?

わたしがこのことをあなた方に問うているのは、トルコにおける国家と宗教の分離の問題をとりあげたあのわたしの記事²⁰の意図を、あなた方がまだ十分に理解しているようには見えないからだ。そこでわたしは至極明瞭に書いているではないか。わたしはただ、トルコが宗教と国家を分離したいくつかの理由について報告をおこなっているだけであると。実際、その連載記事にわたしがつけた表題は、「なぜトルコは宗教と国家を分離したか?」であった。『アディル』のみなさん、トルコはトルコであつて、この国でもあの国でもない。それがゆえにトルコはそのようにしたのである。

抽象論としての国家と宗教の分離の問題は、プロとコントラをかならず生じせしめる事案であり、わたしの連載においてとりたてて扱うところではない。それはめいめいに考えが異なつてしかるべき問題である。わたしの連載の内容はといえば、抽象的な国家と宗教の分離の問題を考えるための材料を提供するということ、つまり、ぜひとも必要な研究のための資料を提供するという以上の特別な目的をもたない。それは客観的分析であり、なにか一つの態度を決めるも

のではない。客観的分析であって、態度、表明ではないのですよ、『アデイル』のみなさん！トルコの現状について、わたしは、わたしに結論をくだす権利があるとは思わないとわざわざ書いた。あなた方はそこを読まなかったのか？

あなた方はまた、わたしが学生層に対して、この問題についての検討事例をより積極的に収集しようと呼びかけたくだりを読んではいないのか？

まことにもってあなた方——あなた方は、まだそれほどダイナミックではないわたしのことをダイナミックすぎるとおっしゃっている！あなた方がわたしのことをダイナミックすぎると言うのを聞くと、わたしは恥ずかしくて耳まで赤く染まってしまう。なぜならわたしはずっとこの社会に存在しているにもかかわらず、トルコのやり方について結論を下すだけの確固たる考えをもてずにいるからだ！

あなた方は、国家と宗教をめぐる問題についてすでに確固たる考えをもっておられるのだろうか？あなた方をみるとわたしは感心する。İk bewonder U!「あなたに憧れる！」と。しかし、もしかするとあなた方は、理想主義と希望の雲の上で、ひたすらぶかぶかと漂っているのにすぎないのかもしれない。その高い雲から現実の大地の上に降り立って、現実的なやり方で大いに語り合おうではないか。ケマル・アタチュルクはつねに現実的であろうとする人であったと、わたしはこれまでの記事のなかで賞賛してきた。われわれもまた、現実的に物事を考えてみようではないか。

現実的になろう。そしてこの問題をさまざまな事実と突き合わせてみようではないか。あなた方が抱いているその理想をまっとうことなく実行すること、実践することを命じられたような気持ちになつて突き合わせてみようではないか。

国家と宗教を分離すべきではない、国家は宗教と一体であるべきだとあなた方は言っている。それはわかるが、しか

29 解説で紹介した七回にわたる連載の論考「なぜトルコは宗教と国家を分離したか？」(“Apa Sebab Turki Memisah Agama dari Negara?”) S.110。

し、あなた方自身がデモクラシーの運用を求めながら、トルコやインド、このインドネシアのように、一部の住民がイスラーム教徒ではない国で、また数百万人も住民がキリスト教徒その他の異教徒である国で、またインテリ層の大部分がイスラミズムの思考様式をもたない国で、いったいどのようにしてあなた方はあなた方の理想を実現しようというのか。宗教と国家の一体化は、いまだあなた方が勝手に抱く理想以上のものとなっていないという事実、そして一つの現実にも一つの出来事にさえもなっていないという事実をあなた方は否定することができない。

仮に、そう仮にあなた方が、多数の非イスラーム教徒住民を抱えた国の統治者になったとして――、あなた方は、その国がイスラーム国家でなくてはならないと定めようとするだろうか？ 憲法はイスラーム憲法、すべての法はイスラームのシャリーアでなくてはならないと定めるだろうか？ キリスト教徒その他の異教徒がそれを拒んだら、あなた方はどうするのか？ インテリ層が拒んだらどうするのか？ それ以外の社会層が拒んだらどうするのか？ 彼らが頭を垂れ、あなた方の願望に黙って従うように、拳で机を叩いて彼らに強制するのか？ 嗚呼、あなた方は独裁者となり、鉄砲や大砲のような武器を使って彼らに強制するのか？ 彼らが従わなければどうするのか？ だがあなた方は、彼らをどこまでも駆逐するようなことはできないだろう。なぜなら現在は新しい時代であり、気ままな掃討や抹殺がまかりとおる時代ではないからだ！

これだ、『アデイル』の諸兄。これこそが現実というものだ。これが実際に存在する物事の姿、これが雲と大地、理想と現実のちがいとしてわれわれの目に刻みこまれるものだ。これが、宗教と抵触する新しい話題があるたび反射的に「じたばたする」諸兄の全員に対して、どうか現実的であれ、頼むから現実的であつてくれとわたしがお願いしていることなのだ。これが、さきほど申し上げたように、「国家の専門家」をそっこのけに「宗教の専門家」だけで話が進められてしまうことについてわたしが懸念をあらわす理由なのだ。

では今からこの問題の解決策について語ろうではないか。それは独裁じみたものであつてはならないし、あなた方が望むようなイスラームのウラマー以外の人々に決別の挨拶をするようなものであつてもならない。むしろこの問題の解決は、宗教について少しも知識のない人々を起点とするところからもたらされるかもしれない。なぜならこの問題の解決をめぐる要諦は近代デモクラシーであるからだ。スルタン統治時代のトルコでは、そのデモクラシーといえるものが存在しなかった。だからトルコはあれほどたやすく「宗教と政治を一体化させる」ことができたのだ。わたしはあなた方のことを見知っているが、あなた方はデモクラシーに賛同しており、したがって仮にあなた方が、わたしがさきほどあげたような国ぐにの統治者になつたとしたら、きつとあなた方はデモクラシーを運用することだろう。あなた方は、拒もうと拒むまいと、この原則こそが近代イデオロギーによつて強く望まれる統治の原則であるがゆえに、きつとこの原則に賛同するだろう。

わたしが知るかぎり、あなた方は、なにより独裁や圧政を憎んでいる。それゆえ、きつとこの原則に賛同するだろう。あるいは——わたしの推測はまちがっているだろうか？　しかしもしあなた方がほんとうにデモクラシーの賛同者であるならば、ぜひともデモクラシーを運用すればよいし、デモクラシーを信じるべきだ！

仮の話として、あなた方が、さきほどわたしが挙げたような国の統治者となれば、デモクラシーの原則に則つて、きつとあなた方は国民議會を開設することだろう。そこでは、信条によつて制約されずに国民のうちから集められた代表者たちが席に着く。イスラームの精神で一〇〇%満たされた代表者がいれば、イスラーム教徒であることはうわべにすぎないような代表者もいる。キリスト教徒の代表者もいれば、宗教をもたない代表者もいる。知識人、商人、農民、労働者、学生もいる。簡単にいうと、それは全国民、全ナーシー「nation」オランダ語の「国民」から選ばれた代表者たちである（スルタン制時代のトルコはこのような議會を開設せず、まさにそのために青年トルコ党の運動が起きたのだ）。

そのようなわけで、わたしはあなた方に提案したい。あなた方は、憲法の条文にわれわれの国は宗教国家であるなどと書いてはならない。なぜなら、信じていたただきたいのだが、そのような憲法こそが国家とイスラーム教を貶めるものがあり、けつして議会で受け入れられるものではないからだ！非イスラーム教徒の側の代表者たちは必死になって反対するであろうし、ほかの代表者だって、「イスラーム」であるにせよ、みな(その大部分はきつと「インテリ層」の人々であろう)があなた方の考えに賛同するわけではない。

国家と宗教を一体化させるあなた方の憲法はきつと崩れ落ちてしまうだろう。あなた方は、暴力や国民の分断といった、デモクラシーの原則をふみこえたやり方でしか、国家と宗教を一体化させるという願望を果たせなくなる。あなた方はテロを起こすだろうか？起こさないだろう。なぜならあなた方はデモクラシーの賛同者であり、独裁を志向する人々ではないからだ。あなた方はまた、現実的であろうとする人たちであり、現実を知ろうとしない類の人たちとは異なるだろう。

というわけで、現実には、住民のまるまる一〇〇%がイスラーム教徒ではない国において、国家と宗教の一体化の原則は、デモクラシーと両立し得ないということ、をわれわれに示している。

そのような国にとってはただ二つの選択肢があるのみで、そのうちのいずれか一つを選ぶしかない。すなわち、デモクラシーをとみなわない国家と宗教の一体化か、国家を宗教から分離したうえでのデモクラシーかである。

宗教と国家は一体化させるけれどもデモクラシーは退けて独裁者を立てるか、それとも、デモクラシーには忠実だけれども宗教と国家の一体化という原則を手放すか、である。

これが現実なのである！しかしあなた方は落胆しなくてもよい。デモクラシーによる保証として、その憲法に宗教との分離を記した国家では、デモクラシーが運用されるかぎり、イスラームのシャリーアに沿った諸法が国民議会にお

いて制定される可能性は閉ざされていないからだ。たとえばあなたが豚の飼育を禁じる法を望んだとしよう。あるいは飲酒を禁じる法を望んだとしよう。議會をうめる代表者の大多数が豚の飼育や飲酒に反対しているのであれば、そこにはなんの困難もない！ しかしながら、もし豚の飼育や飲酒に反対する代表者の数が足りていなければどうか？ それはあなた方の民衆がまだ「イスラーム民衆」となっていないことの証である！ あなた方は、民衆のあいだであらゆる力を尽くしてプロパガンダをおこない、できるだけたくさんの方の代表者を国民議會に送りこむがよい。民衆のイスラーム精神をかき立てて、鼻という鼻をイスラームの鼻に、脳という脳をイスラームの脳に、清掃員のアブドウルから町で自動車を乗りまわす金持ちまで——そのようにして国民議會を、その政治もイスラーム、その心もイスラーム、その血もイスラーム、身体の毛の一本一本までイスラームである代表者であふれさせたらよい！ そうしてあなた方の代表者であふれさせることができたならば、イスラームのシャリーアで望まれるところのものはすべておのずと国民議會の決議となつてあらわれるだろう。あなた方のあらゆる願望は国民議會において実現するだろう。その国家は、憲法に宗教国家であることを示す条文がなくても、また宗教国家であることをあえて公言せずとも、おのずとイスラーム国家としての性格をもつことになる。³⁰ 同時に、そのような場所にいる民衆は、正真正銘のイスラーム精神をもつ民衆であり、イスラーム国家に身を置きながら、内面ではイスラームについて冷めていたり、イスラームを否定しているような、名目ばかりの民衆ではない。

『アディル』の諸兄。イスラームは、その国家がイスラーム国家であるという公式の声明を求める宗教ではない。イ

30 一般に、あるいは学術的に、「イスラーム国家」というのはシャリーアを法規範にして統治がおこなわれる国家のことである。しかし、読んでのとおり、スカルノはここで「イスラーム国家」を厳密に定義しているわけではない。このくだり以下で述べられている「イスラーム国家」とはスカルノ自身による修辭にほかならない。

スラームが求めているのは、ウンマの胸の内にあるイスラーム信仰の炎を真に包みあつめたような国家である。これはウンマの全身を真に包みこむイスラームの炎であり、これはまた、一枚の紙の上に「国家は宗教に基づく」と書いて説明されるものとは異なるかたちで国家をイスラーム国家に変えるものだ。なにゆえにわれわれは国家を「宗教から分離する」という憲政の知恵(国法の知恵)を怖れるのか? 「デモクラシーのもとで宗教から分離された」国家は、完全に本物のイスラーム国家となりうるのである! なにゆえに憲政の知恵を怖れるのか? 近代デモクラシーからイスラーム教徒に突きつきられた試練や挑戦状としてその憲政の知恵を享受し、用いるほうが男らしいのではないだろうか? われわれは次のように言明したほうがよいし、男らしいだろう。「よし、われわれは国家と宗教の分離を受け入れよう。しかしわれわれは、すべての民衆をイスラームの炎で燃え上がらせてみせるぞ。国民議会のすべての代表者がイスラームの代表者となり、国民議会におけるすべての決議がイスラームの魂と精神を反映するようになるまでに!」

あなた方がほんとうに民衆をそのように燃え上がらせたのなら、そのときあなた方は言うがよい。彼らのイスラームは生きたイスラームであると。健全なイスラームであると。ダイナミックなイスラームであると。そして国家の「後見」や「保護」がなくては、ただ存在するばかりで活気のないイスラームではないと。わたしは、「国家とイスラームを分離するな」といつもうめき声をあげている民衆よりは、近代デモクラシーの挑戦を受ける勇氣のある民衆のほうが好ましいと思う。その挑戦を受ける勇氣のある民衆こそが、みずからの闘いとともに、みずからの汗とともに、そしてみずからの粉骨努力とともに、イスラームの理想を実現できる人たちなのである。

そのような民衆こそが、精神と体力の紆余曲折をともなつた人生の闘いをもつてイスラームの理想を真に実現できる。そのような民衆がいて、国家は真の意味で「イスラームとひとつになつた」ひとつの国、すなわち真正銘のイスラーム国家となる。

このわたしの発言について熟考していただきたい。なぜなら——どうか聞いてほしいのだが——これこそが、国家は「宗教と一体化させるべきだ」というイスラームの理想について、真にわたしが理解し、信じているところのものであるからだ。憲法上において分離されていようとも、国家は宗教とひとつになれるはずなのだ。今日の見本として古き時代のスペインを例にとるのはやめないか。古き時代のスペインは、今日あるような近代デモクラシーなど知るべくもなかったからだ。古き時代ならば、スルタンやカリフが玉座にいれば事は治まったかもしれない。しかし現在、一人の民衆の要望が、おのずとその肉体と精神のすべてを国家形成の動乱に献上しようとする時代である。ふたたび言うので聞いてほしい。わたしは、「スペインのまねをせよ」とばかりに、スルタンかカリフに何かを命じられることを待つ民衆よりも、近代デモクラシーのもとの国家と宗教の分離という挑戦を受ける勇氣をもつ民衆のほうが好ましいと考える。

近代デモクラシーのもとで、みずからの闘争によってイスラームの理想を実現する能力をもたない民衆がいる。また、イスラームの代表者によって国民議會をあふれさせることのできない民衆がいる。そのような民衆は、あなた方がダイナミックと形容するわたしの精神の鼓動に照らすならば、まだ本物の「イスラーム民衆」と呼ぶことのできない人々だ。そのような民衆は、そのイスラームがまだうわべだけのイスラームにすぎず、その信仰心もそのへんに転がっているようなものにすぎないという実態をみずからさらしている。わたしが「ダイナミック」なふるまいをする悪者となり、いつも叫び声をあげて騒ぎを起こす。そして民衆が目覚めてダイナミックとなるよう、彼らの固まりを解きほぐすほうがまだしもではないか。燃えるようなイスラーム精神のダイナミックさに見合わない古くさい考えにむかって愛想をふりまくよりも、そのほうがよいのではないだろうか。わたしの精神——そう、あなた方がダイナミックだと言うわたしの精神においては——男らしく宗教と国家を分離した近代デモクラシーを受け入れるよう民衆を促すほうが好ましい。——国民議會のすべての代表者が、肉体と精神のすべてを弛まない訓練と闘争の場に注ぎ込み、イスラームの要求

に賛同する代表者となるように！あなた方がダイナミックだというわたしの精神は、近代デモクラシーの挑戦をともに受けて立って、こう呼びかける。もしあなたがほんとうにイスラーム民衆であるならば、勇らしく国民議會をイスラームの代表者であふれさせようではないかと！

宗教と国家の問題についての想像上の話はここまでとしよう。わたしは、あなた方が理想主義の雲の上から大地にある現実的な思考の場へこの問題を移し変えてくれるように、あえてこの問題を「道德化」しつつ、あたかもあなた方がすべての民衆がイスラーム志向をもつわけではない国の統治者となった場合を想像していた。まったくのころ、「イスラームによれば国家は宗教と一体化しなくてはならない」と発信するのはいたって簡単なことである。しかし、その美しい理想を現実に変えるのは究極的にむずかしい問題なのだ。理想を唱えるのは至極容易であるが、それを実行しようと思えば、「宗教の専門的知識」だけでは不十分だ。その実行においてはむしろ、「国家の専門的知識」が必要とされることだろう。

あなた方はわたしのことをダイナミックすぎるとおっしゃった。その賞賛の言葉を感謝の意とともに受けとめたい。昼も夜も、わたしは全能の神アッラーに、わたしをもっとダイナミックにしてくださいと請うている！

昼も夜も、わたしはやはりアッラーに請うている。あなた方、イスラームのウラマーたちの精神や思考をもダイナミックにしてくださいと。古く凝り固まった心や思考を覚醒させてくださいと。また、少しでも早く、古くさいイスラームによつて置き去りにされてきた真のイスラームの、その煙や灰だけではなく、炎をつかみとれるようにと。あなた方はわたしのことをダイナミックすぎると言う。わたしはこう答える。アッラーよ、神よ、わたしのそのダイナミックさをさらに高めてくださいと！

「この訳文と解説は、見市建、茅根由佳、野中葉の諸氏をメンバーとする研究会でコメントをいただきながら執筆した。深く感謝申し上げます。」